

The Japan Society for Intercultural Studies

日本国際文化学会 ニューズレター

第1号 2001年12月21日発行

編集・発行

日本国際文化学会事務局

〒520-2194

滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5

龍谷大学瀬田学舎 松井賢一研究室

TEL/FAX 077-543-7866

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/jsics/>



1

日本国際文化学会設立!

2001年11月10日、紅葉にまつまれた滋賀県の龍谷大学瀬田キャンパスにおいて、日本国際文化学会が設立されました。この新しい学会は、従来、異なる国家と国家との間の関係として考えられてきた国際関係(Internationality)の枠組みを、異なる文化と文化との関係(Interculturality)としてとらえ直すことを主な目的として、国内の諸大学の国際文化学部・学科・研究科などが中心となって構想を進めてきたものです。異文化間の摩擦の問題や、多文化共存のための枠組みに関して、方法論的な研究を進めるだけでなく、教育やその他さまざまなフィールドにおける実践にも主眼を置くという本学会の設立趣意書は、さいわい多くの関連機関や研究者の賛同を得て、順調に学会の設立に至ることができました。

この日の設立イベントでは、午前中に行われた発起人総会で趣意書、発起人名簿、学会規約などの確認が行われ、会長に平野健一郎早稲田大学教授、副会長に小林哲也プール学院大学学長と松井賢一龍谷大学国際文化学部長が選出されました。続いて午後からは、設立に深く関わってきた平野健一郎氏による基調講演と、司会を含めて六人のパネリストによるシンポジウムが開催され、「国際文化学」という概念の定義や、研究・教育の現場における取り組みに関する活発な討論が展開されました。シンポジウム終了後は、懇親会場に席を移して、さまざまな大学の国際文化学系の大学院生も含めて、最後まで100名近い研究者による交流や情報交換が行われることとなりました。

学会の設立にともない、事務局では事業目的の一つであるニューズレターの発行を随時行います。当面は不定期ですが、学会に関するさまざまな情報をお届けしていきたいと考えています。本号第一号では、十一月十日の基調講演とシンポジウムに関して、当日収録したテープから、さわりの部分のみを拾って簡単に紹介することにします。

基調講演(2001年11月10日 13:00~14:00、於龍谷大学瀬田学舎RECホール)

平野健一郎:早稲田大学政経学部教授。本学会会長。著書に『国際文化論』(東大出版会)など。

設立記念シンポジウム(14:00~16:30)

司会/松井 賢一:龍谷大学国際文化学部長。著書に『世界のエネルギー世論を読む』(電力新報社)など。

パネリスト/

川村 湊:法政大学国際文化学部教授。著書に『生まれたらそこがふるさと-在日朝鮮人文学論』(平凡社)など。

ポーリン・ケント:龍谷大学国際文化学部助教授。著書に『世界のなかの日本型システム』(共著・新曜社)

など。

小林 哲也:プール学院大学学長。著書に『国際文化学』(アカデミア出版会、近刊予定)など。

須藤 健一:神戸大学国際文化学部教授。著書に『母系社会の構造-サンゴ礁の島々の民族誌』(紀伊国屋書店)など。

寺田 元一:名古屋市立大学国際文化学科教授。著書に『国際文化学への招待』(共著、新評論)など。

以下、基調講演・シンポジウムからの抜粋

9月11日のテロと国際社会

平野 9月11日を境に、人類の歴史はそれ以前とそれ以後に分けられることになりました。日本国際文化学会の創立は9月11日以前に提唱され、企画も進められて来ていましたが、設立総会は本日、つまり9月11日以後の世界に行われることになりました。日本国際文化学会の設立は実に意味深く、このタイミングは実に見事であるということが出来ます。もっとも世界の情勢や人類の歴史は9月11日で一変した訳ではありません。テロは、ある意味で早くから予想され、今回のテロが白日の下に曝すことになった世界の変化は、すでに相当以前から進行していたと考えられます。同様に、日本国際文化学会の設立も国内国外の情勢の変化に応じて、早くから求められていたものと思われれます。

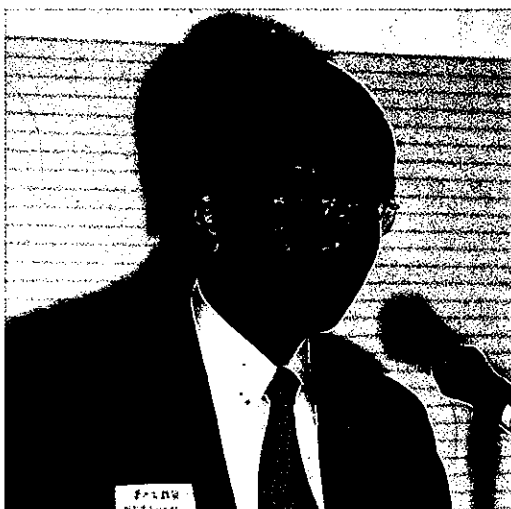
9月11日のテロのターゲットは二つでありました。一つは、世界貿易センタービルでありました。もう一

つは国防省でありました。「世界」と「国」であります。国防省は原語では Department of Defense で、国を意味する単語は入っておりませんが、Defense は National Defense の意味でありますから、「国防省」という日本語は適訳です。世界貿易センタービルもアメリカの建物であったにちがいはありませんが、そこでは60以上の異なる国籍の人が働いていたということでもありますし、中には正規に米国に入国したのではない外国人も多数、レストランのウェイトレスやピザ屋のアルバイトなどとして働いていて、命を失ったということです。世界貿易センタービルはまさに、今日の世界の縮図であったということが出来ます。世界貿易センタービルも、国防省もアメリカ合衆国の領土内の建造物であり、テロリストは米国の国境を越えて領土内に入り、米国の国家主権を犯して犯罪行為を行ったのですから、米国政府がやっきとなって報復攻撃に突き進んでいることは理解できないことではありません。しかし、私たちが世界貿易センタービルの爆破と崩壊にかつてない衝撃を覚え、アフガニスタンへの連日の爆撃に納得が行かないのは、世界が国家主権万能の時代から大きく変わったからであると思われれます。世界貿易センターと国防省が同時テロのターゲットとなったということは、今日の国際社会の歴史的構造を如実に示したものです。

「国際文化」という語が持つ可能性

〈基調講演中間部では、「国際」「文化」の定義について詳細な検討が行われた。〉

以上、二つの「国際」と「文化」という語を合体させて「国際文化」としますと、我々は現代の国際社会



平野健一郎氏



松井賢一氏(司会)

における文化の状況を捉えるのにもっともふさわしい、柔軟な視点を獲得することになります。合体させると「国際」も「文化」も新しい意味を帯びます。この「国際文化」はかつての国際文化、たとえば国際文化会館といった言葉に今でもまわりついているエリート主義的で古典的な視点とは大きく異なるものでしょう。それは、一見グローバリゼーションと呼ばれる外部との接触によって引き起こされているかに見える社会変容、実はすべての社会の人々がいくつもの次元においてそのグローバリゼーションに主体的に対応すべく、生きるための工夫を積み重ねていくことによって引き起こしている文化触変のダイナミズムをとらえるのになくしてはならない視点となります。社会全体としての国際社会が見え始め、重層的な構造を持った国際社会と、その中で複合的なアイデンティティを持って生きる人々に呼応して、文化の関係、文化の変化を考えるのなら、国際文化という視点を欠くことはできないと思います。

80年代、90年代の日本の大学における制度変更の中で生まれた学部や学科の名称としての国際文化については、同じ大学の同僚の中からも「苦し紛れの思いつきにすぎない名前さ」といったたぐいの揶揄が浴びせられたかもしれません。しかし、まさに人類史的なといつてよいような変化の苦しみの中から生み出されたものであるからこそ、70年代から始まっていた歴史的な国際社会の変化に見合った概念なのではないでしょうか。ただ、国際文化という概念に我々が楽観的に依存することは許されないでしょう。国際文化学は、「国際文化」と呼びうる文化が存在するとか、あるいは生まれつつあるとかといったことを前提として、その「国際文化」について研究するという学問ではありません。まず、国際文化は単純楽天的でのっぺらぼうな世界文化や地球文化と同じではないことを我々自身が自覚して、人々に知ってもらう必要があります。たとえば、国際文化の中には、さまざまな次元でのさまざまな方向性

に向かう「文化」際の関係が、同時多発的に動いており、無数の摩擦・葛藤・紛争を生ずるというメカニズムが含まれております。それらを人々の生きる力に転化して、よりよい文化を作り出して行くには、実践面でも研究面でも、新しい見方によって、知的な想像力を発揮しなければならないでしょう。国際文化は、けっして文化の一元化をもたらすものでもありません。逆に、文化の多様性を擁護する理論となり、文化の多様性を維持する実践の支えとならなければなりません。文化は、現に一人の人間が存在する時空の中で、意味のある生活を送るためのものです。とするならば、文化は多様でなければならない、多様である以外にないのです。・・・
(この抜粋は編集部でごく一部をまとめたものです。完全版については、2002年度末から発行される学会誌などで紹介できるものと考えています。)

外ではなく内にもある「国際文化」

川村 国際文化というのが語られるのは、先ほど平野先生もおっしゃっていたように、日本も国際化し、国際文化というものが登場してきて単に国家対国家というのではない国際という言葉の意味が広がってきたところで国際文化の必要性を考えようという考え方が出てきたと思います。しかし、もう一つには、もともとの国内文化というか、国民文化というかその中に国際的というか、ナショナルなものの中にもインターナショナルがあったということが文化人類学とか文学でも研究が進んできたのではないかと思います。例えば、私の専攻している日本文学つまり日本人が日本の中で文学をやっているというような考え方が、最近では、それだけでは納まらなくなってきたというか違ってきたように思います。

中略(文化的・言語的多様性の問題を含んだ日本文学の例として、リービ英雄氏、李良枝氏らの日本語による小説、さらに植民地文学の問題などが語られる。)



川村 湊氏

日本語文学の中でも、国内的文学と思われてきた中に、むしろ国際文化がある。そういったものを内在しているという観点から国際文化学を作り上げていく必要があるという風に思っています。国際文化学というのは、どうしてもイメージ的に外側に広がっていき、外国語を勉強して国際交流を行い、国際関係論をという方向性がつよいものです。けれども、まさに国内的だと思われていたもの、日本的だと思われていたものの中に非日本的なもの、外在的なもの、国際的なものが実はあるといったようなことで、そのリズムの枠のようなものを解体していく、そういう形の国際文化学というものがあろうのではないかという風に思っております。

「国際文化学」は文化の衝突を学ぶ学問である
ケント〈9月11日のアメリカ同時多発テロ事件について、文明の衝突が叫ばれているが・・・〉

学生のレポートのよく最後の締めくくりとして、異文化を分かり合えたらいいんだとか、あるいは分かり合えることによって世界が一つになって平和になるとか、まあ、美しいんですけど何の解決にもなりません。そういう意味で、彼らは何となく変な文化相対主義が植え付けられた、あるいは非常に甘い考えをしているんです。それでは比較文化の勉強にはならないと思います。つまり、彼らは文化というものを言い訳に、自らの判断をしないようにしています。今回のテロ事件の発生に、学生は大きな衝撃を受けたようです。しかし、深く考える訓練はあまり受けてきていないので、その次はどうするか、あるいは自分の立場はどうなんだということに関してはなかなか出てこないし、また、その立場をはっきりさせたがらないというところもあります。

皆さんもよくご存知だと思うんですけど、異文化と接する際、必ずぶつかる、つまり衝突するという経

験をするんですね。そして、文化が違うからこそどこかで判断をしないとイケない。ただそのためには自分の立場をしっかりと持っていないとどうしようもないんですね。ですから、文化を知識としてではなくて、自分の体験として比較文化を勉強しないとイケないと思います。このような勉強においては、衝突することを必修科目として設置すべきではないかと思うんですね。しかし、日本では、比較文化や国際文化に関する勉強はなぜか華やかで非常に美しいというイメージがありすぎて、そのイメージの方に走っていく学生が多すぎます。しかし、そのようなイメージでは、国際政治の中の、いろんなきたないことも起こっている、非常に複雑ないろんな事が同時に起こっているということについて理解するということが非常に難しくなるんですね。

ですから、異文化を勉強さえすればよいというのは大嘘。私達は、彼らには、例えば知れば知るほど嫌いになるということが充分あろうということを教えていかなければならないと思います。そこで、比較文化や国際文化を勉強するだけではなくて、文化の衝突を実感することが大事ではないかと思います。衝突といってもいろんな段階があって、死ぬつもりでやる必要はありません。その段階を選んでぶつかっていく。ぶつかりながら、相手と自分のことを理解しようとするのが大事で、自分の立場をはっきりさせることが最も大事だと思います。これは、特に日本人の学生にとって大きな課題となると思います。彼らは、トラブルとか困難を回避する傾向にあるために、問題の解決について非常に貧相な発想をします。あるいはトレランス、寛容度が非常に低いです。やはり、いろいろな人に接することによって、これが上がっていくような気がします。

〈シンポジウム抜粋の続き（小林氏・須藤氏・寺田氏発言部分と討論部分）に関しては、ニューズレター第二号以降に掲載していきます。また、第二号では寺田氏による本年11月のバルセロナでのインターカルチュラルリティ国際学会の報告なども併せて掲載したいと考えています。乞御期待。〉

日本国際文化学会入会のお願い

本学会では正会員を募集しております。会費は下記のようにになっており、初年度分のみは2001年10月～2003年3月（学会誌第一号を含む）となっております。所定の申し込み用紙（学会HPからもダウンロード可）をお送り下さり（FAX可）、郵便為替にてご入金下さった時点で会員として登録し、第二号以降のニューズレターおよび学会誌をお送りしたいと考えておりますので、よろしくお願いたします。

会費／正会員 1万円
（ただし、大学院生は5,000円）
（ただし学部学生は2,000円、学会誌は別途購入）



ボーリン・ケント氏